

## ホーチミン市博物館（ベトナム歩道 第8回）

著者	寺本 実
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	241
ページ	52-52
発行年	2015-10
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00003099">http://hdl.handle.net/2344/00003099</a>

「オーイ煙草!」。車道を挟み、反対側の歩道で小売商いをしている女性に対して、筆者側にいる路上喫茶店の女性店主が呼びかけた。客が一服所望したのだ。すぐ近くに横断歩道がある。向こう側の女性は歩いてこちらに渡ってくるだろうと思っていると、やおら右腕を空に向かつて突き上げた。「え?」。同女性は腕を思い切り振り下ろした。見事なオーバースロー。煙草の箱は車道に広がる多くの自動車、バイク、自転車の頭上を越えて、無事にこちらに着地した。

暑さの続くホーチミン市中心街に位置するこの現場から同じリー・トゥ・チョン通りを一分ほど歩いた所に、ホーチミン市博物館はある。同博物館前の歩道では、朝方よく目が不自由な

男性とその母親と思しき女性が車道近くに立ち、男性が片方の鼻の穴で笛を吹き、その隣りで女性が宝くじを売っていた。また、果物売りの女性が自転車でやって来て、各種車両の運転手たちを目当てに道路脇で商いをしたりしていた。

このように筆者が二〇一四年三月末から一年間滞在した折りに見た同博物館の周辺は、どこか庶民的な雰囲気であった。

ちなみに筆者の通勤経路には博物館がいくつか点在していた。例えば帰り道。リー・トゥ・チョン通りをホーチミン市博物館の方向に進み、左手に同博物館を見ながら右折してパスター（パストール）通りに入る。同通りをまっすぐ歩き、ナムキー・ホイ・ギア（南圻蜂起）通りに面する統一会堂（元ベトナム共和国独立宮殿）を左手に見ながらそのまま進むと、ヴォー・ヴァン・タン通りが出る。左折して道なりに歩いていくと、右手に戦争証跡博物館が見えてくる……というような具合であった。

その中で最も身近だったのは仕事場に程近い

ホーチミン市博物館。とはいえ、同博物館の当地に関わる自然、地理、文化、芸術、歴史などの展示に特別な関心を持っていただけではない。

そんな不謹慎な筆者が、同博物館のウェブサイトに掲載の諸資料を読み、同博物館の建物（以下、「建物」と記す）の数奇ともいえる歴史の一端を知ったのは、随分後になってからのことだった。以下、同資料を含むいくつかの現地資料に依拠しながら、その歴史を少し概観したい。

ホーチミン市博物館の「建物」は、フランスのインドシナ植民地支配が強まる一八八五〜九〇年に内地の産物を展示する商業博物館として建設された。だが、竣工後には仏南圻総督邸とされるなど、政治的に用いられる。

一九四〇年九月の北部仏印進駐、一九四一年七月の南部仏印進駐を経て、一九四五年三月九日に「明号作戦」発動による仏印武力処理を行った日本も、同作戦発動後、この「建物」の主となった。そして同年七月、日本軍庇護の下、グエン朝のバオダイ帝により首相に指名されたチャン・チョン・キム政権に引き渡される。同年八月、「日本軍、連合国に降伏」との情報を受けて、インドシナ共産党の指導下にベトナムが蜂起する八月革命が起き、「建物」も接收されて、南部暫定行政委員会、後に南部人民委員会として使用される。その後ポツダム協定に基づき、北緯一六度線を境にベトナムは南北に分断され、一六度線以北には中国国民党政府軍、以南にはイギリス軍が進駐する。これにともない、「建物」は同年九月一〇日にイギリスに引き渡される。しかし、九月下旬、イギリスの支持を受けたフランスが再侵略を開始する。フランスは一九四六年三月六日にベトナム民主共和国側と予備協定を結ぶ一方で、南部にコーチ

ナ共和国を樹立し、同政府の居所として「建物」を使用する。同国は、一九四九年六月にフランスの後押しを受けて形式的にベトナム全土を統一したベトナム国に併合される。

ベトナム国元首に就任したバオダイからジュネーブ会議期間中の一九五四年七月に組閣を要請されたゴー・ディン・ジエムは、一九五五年四月にバオダイに引退を求め、六月には元首に就任した。さらに同年一〇月には共和制が王政かの民意を問う国民投票を実施し、圧倒的な支持を得てベトナム共和国を発足させ、初代大統領に就任する。この間、「建物」は国賓用施設など重要施設として使用された。

一九六二年二月二七日に独立宮殿が空爆被害を受け、「建物」は大統領府として使用されることになる。一九六二年五月から一九六三年一〇月にかけて「建物」では地下秘密施設の建設工事が行われ、ジエム大統領らはクーデターで命を落とす一九六三年一月二日の前日、一時同施設に避難している。

独立宮殿の再築後には、ベトナム共和国の最高裁判所として「建物」は使用された。一九七五年四月三〇日にサイゴンが陥落し、ベトナム戦争が終わる。翌年には現体制が形づくられ、ほどなく「建物」は博物館として使用されることが決まった。一九七八年八月一二日にホーチミン市革命博物館とされ、一九九九年一二月一三日にはホーチミン市博物館と改称されて、現在に至る。

今では館内に入ると、新婚カップルが記念撮影をしていることも。諸行無常。「建物」はベトナムの人々の歩みを静かに見つめている。

（つらもと みのる／アジア経済研究所 前在ベトナム海外研究員）